

## 受難節、十字架の遠さ

牧師 山本 護

「ペトロが〔わたしの足など、決して洗わないでください〕と言うと、イエスは〔もしわたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしと何のかかわりもないことになる〕と答えられた(ヨハネ 13:8)」。

●  
十字架が間近に迫り、イエスの底知れぬ愛は弟子の足を洗う行為として顕れました。教えを解する頭ではなく、思いが響く胸でもなく、感情の出処であるハラワタでもない、足。だから私たちは、天を仰ぐだけでなく自分の足許を見て祈ります。

ある偶然から、私の乱雑な書棚に納まっていた田口義弘(田口牧師のお兄さん)の詩集『遠日点』。田口はリルケ研究で知られた独文学者ですが、詩は平易な日本語で、存在の不吉な裂け目を淡々と語ります。その中の「キリストの脚」という詩。

「キリストとロバは人びとの敷いた棕櫚の上で／ちょっと身をすべらしもした。／キリストとロバは神殿の庭で休息し／キリストはそのときロバの足を洗った、／まずロバの汚れた脚を」。詩人はロバをキリスト者の喩にしているのでしょうか。

私たちは、熱烈歓迎と冷笑が入り混じった棕櫚の葉に足をとられ、キリストもまたズッコケる。「この弱い動物、この世間知らずの動物」と共に身を滑らすキリスト。しかし私たちが従えるのはここまでです。

「ゴルゴタへ登っていく道では／キリストの連れはもうロバではなく、／ロバよりも重く暗い、腕も折れるほどに重い刑具だった」。十字架、すぐその丘の上に見えながら、なんという遠方なのでしょう。

「十字架のうえではキリストの脚は／血にまみれて醜く汚れ、／しかし苦しみの柱に合わせて次第に長くなり／細く尖ったその先で地と地の闇を指し、／そしてこんな足先から徐々に彼は死んでいった」。キリストの脚が柱に合わせて次第に長くなる。奇妙な表象ですが解釈ではなく感じるができます。

『遠日点』には「ジャコメッティの猫」という詩も収められていて、その結びは「黒い鑄鉄の細工めいた神秘だけが私たちに残った」。ジャコメッティの彫刻やデッサンから「細く尖ったその先で地と地の闇を指し」が一つの像として浮かびます。

十字架はロバが逃げ出してしまうほどに遠い(マルコ 14:50)。しかしそれでも「大勢の婦人たちが遠くから見守っていた(マタイ 27:55)」。地の闇を指すキリストの尖った足先。その「鑄鉄の細工めいた神秘」が、人の世の闇に驚くべき光を灯す。Ω

